

子ちゃん
幼馴染は
メンヘラ
依存体質で
くそデカ
感情

わからせ
ぐちゃとろ
愛撫で
連続絶頂
させられる話



チャライ幼馴染はメンヘラ依存体質でクソデカ感情わからせぐちゃとろ愛撫で連続絶頂させられる話

登場人物

水瀬 花（みなせ はな）…私。幼い頃からずっと隣にいた幼馴染・理玖を「眩しい人」だと思い続け、自分とは釣り合わないと言ってきた。普通のOL。やりたい事も夢もなく、ただ日常を過ごしている。

架川 理玖（かけがわ りく）…容姿端麗、頭脳明晰、人当たりもいい。誰から見ても完璧な男。181センチ。痩せ型だが、筋肉はしっかりついている。幼い頃から花だけに向け続けた異常な執着がある。花に拒絶されることを恐れ、想いを隠したまま他人を愛そうとしたが、一度も忘れられなかった。花の人生を中心に進学も生活も選り続けてきた男。救いようがないほど重く、支配したい。

春の終わりが近づいて、高い空が揺れている。
生ぬるい風が、まだ柔らかい私の頬を撫でて通り過ぎた。

「はなちゃん、手、だして」

くぐもった、でもどこか意志の強い声。

目の前にしゃがみこんでいる理玖が、泥に汚れた小さな手で、私の指を強引に引き寄せた。理玖の手の中には、数本のシロツメクサ。

さっきまでそこら中に咲いていたはずの白い花は、理玖の指先で無惨に茎を折られ、編み込まれ、歪な円の形に変えられていた。

「……いたいよ、りくくん」

ぎゅっと結ばれた茎が指に食い込む。けれど、理玖は力を緩めない。

それどころか、爪が白くなるほどの強さで、私の指にその「輪」を押し込んだ。

「これで、ぼくのもの」

理玖が顔を上げた。幼い子供特有の無垢な瞳。けれどその奥にある光は、おままごとの「王子様」にしてはあまりに暗く重かった。

「ぼくとけっこんしようね。……ねえ、はなちゃん、いいよね？」

逃げることを許さないような静かな圧に、私は食い込む茎の痛みに苦笑いしながら、その瞳に吸い寄せられるように頷いた。

「うん、いいよ」

その瞬間、理玖がふわりと嬉しそうに笑った。花の香りと、泥の匂い。薬指に残った、消えないほどに強い圧迫感。

「やくそく、やくそくだよ」

「うん、やくそく」

あの日、私の指にはまったのは、可憐な花の指輪なんかじゃなかった。

それは、一生剥がすことのできない、呪いのような約束の証。

十年以上経った今でも、指があの中の時の感触を思い出して疼くことがある。

子どもだったから、笑って流せたはずなのに。

理玖だけは、あの時の目を一度も逸らしていなかったなんて、当時の私はこれっぽっちも気づいていなかった。

◇

理玖の執着は、年を追うごとに巧妙で、けれどどこか強引なものになっていった。

「花！待って、置いてくよ」

校門を出る時、背後から私を呼ぶ大きな声が聞こえて振り返れば、部活終わりの理玖がまだ汗の引かない顔で駆け寄ってくる。理玖は当然のように私の隣を陣取ると、重たい鞆の端をわざとぶつけて、私の歩幅を強引に自分に合わせながら同じ帰路を辿るのがいつものルーティンになっていた。ふと思いついて、私は隣を歩く理玖に訊ねた。

「理玖ってさ、部活の男友達とかいないの？たまにはあっちと帰ればいいのに。私とばかりいたら、友達減っちゃうよ？」

理玖は一瞬、足を止めた。けれどすぐに鼻先で笑って、私の鞆のストラップを指先でぐいっと引き寄せる。

「……あいつら？いいよ、あんなの。お前と一緒にいる方が、俺にとっては都合がいいから」

「都合？」

「そう。俺がここにいないと、お前、隙だらけだろ。変なのが寄ってきてても気づかないし。お前が一人で歩いてると、なんか、周りの視線がうざいんだよね」

理玖は不機嫌そうに目を細めた。卒業後に知ったことだけど、部活内では私のことが密かに話題になっていたらしい。でも、理玖が周囲に放つ「近寄るな」というオーラがあまりに鋭すぎて、誰も私に声をかけられなかったのだとか。そんな理玖の牽制は教室でも続いた。

「花あゝ、社会の教科書貸し…」

隣のクラスからひょいと顔を覗かせ教科書を借りに来た理玖が、たまたま私の近くにいた男子生徒と鉢合わせた時のことだ。

「水瀬、ちょっといい？」

男子が話しかけてきた瞬間、理玖は足早に近づき、その男子と私の間に割り込むようにして机にドカッと腰を下ろした。

「あ、悪い。今から花と大事な話があるから。な、花？」

「あ、えと……」

「な？」

「あー、なんかごめんね？」

バツが悪そうに男子生徒が廊下へ出て行くと、理玖は私にしか見えない角度で、その背中を冷たく射抜くような視線で一瞥した。

「男の友達ちゃんと作れば？」

私が呆れてそう言うと、理玖は熱の籠もった低い声で零した。

「いるけどさ、男友達も。けど、深い関係なんていないだろ。俺には花がいるし」

「バカじゃないの。じゃあ私が代わりに深ーい関係の男友達作って紹介してあげようか？ そうしたらすごく仲良くなるんじゃない？」

「は？俺以外の男の知り合いなんて必要ないだろ。俺がこれだけ近くにいて、まだ他の男と深い関係になりたいって言うなら、もっと四六時中一緒にいて深ーい関係築いてやってもいいけど」

私は冗談だと思って笑い飛ばしたけれど、理玖は笑っていなかった。その目は「冗談で済ませるつもりはない」と言っていた。

「俺のことだけ見てればいいんだよ、お前は」

教科書を受け取る理玖の手が、一瞬だけ私の指先に触れた。その熱さが、ただの体温以上の意味を持っていることに、当時の私はまだ蓋をしていた。

◇

「俺たち、同じ高校受けようぜ」

中学三年の秋、理玖にそう提案された時、たまたま私の志望校と同じだったこともあり、私は深く考えずにその案を飲んだ。

無事に揃って合格し、これでまた同じような毎日が続くのだと思っていた。けれど、高校1年の冬のある昼休みに友達からふと尋ねられた。

「ねえ花。理玖ちゃんと付き合わないの？ 幼馴染なんでしょ？」

「そうそう。あんなにかっこいい幼馴染がいるなんて、少女漫画じゃん！」

無邪気に目を輝かせる友人たちに、私は自分でも驚くくらい自然に笑って答えていた。

「んー、無理かなあ」

「は？まじ？なんで!？」

「え、だって……正直、私と釣り合うわけじゃないじゃん」

あんなにキラキラして、誰にでもチャホヤされる人と、ただの幼馴染の私が釣り合うはずがない。

本当は、ただそう思っていただけだった。傷つく前に、予防線を張っただけ。

その日の午後、廊下で理玖とすれ違った。

いつもなら気だるそうに手を振るか、肩をぶつけてくるかのどちらかなのに。理玖は私を見たはずなのに、そのまま何も言わずに通り過ぎた。横顔がひどく強張っていた。

(……なんか、怒ってる?)

思い当たることが何もなく、私はその背中をただ見送った。

それが最後だった。理玖が自分から私に近づいてくることは、それ以来ぱったりとなくなった。

目に見えて変わっていった理玖を、私はどこか遠くから眺めるようになった。

容姿の整った理玖は当然のように目立った。校内を歩けば女の子に囲まれ、登下校も毎回違う子と連れ立っている。

最初は「環境の変化のせいだ」と思おうとした。男友達とつるんでいるのも、新しい人間関係を築いている最中なのだと。

けれど、頻繁に隣を歩く女の子が変わるたびに、私は胸の奥がチクツと痛むのを無視して、少しずつ自分の想いに蓋をしていった。

ああ、この人はそういう人だったんだ。

学校ではお互いグループで行動することが増え、廊下ですれ違えば、ごく稀に軽く手を振り合う程度。幼馴染としての距離は、急速に遠ざかっていった。

それから少しして、理玖が同じ高校の先輩と付き合っているという噂が流れた。華やかで美人と評判の先輩。やっぱり、理玖にはああいいう人が似合うんだと、私は胸の痛みを飲み込んだ。けれど奇妙な噂も一緒に耳に入ってきた。

先輩はよく理玖のいるクラスへ遊びに来るらしいのだが、理玖は手を振るだけで自分からは近づこうとしない。その塩対応に、先輩が何度も怒って教室に帰ってしまうらしい。

（付き合ってるのに、なんでそんな態度をとるんだろう……）

そんな疑問を抱いていたある日の放課後。
私は教室に残って、掃除当番の仕事をこなしていた。横では、同じ班の男子が箒をバット代わりにしてふざけている。

「ちょっと、ちゃんと掃除してよ！」

「なんだよ水瀬、お前も野球したいの？」

「違うわ！早く終わらせて帰りたいの！」

「じゃあお前バッテリーやらしてやるよ」

「話聞いてた？」

じゃれ合うように話していたその時だった。

バンッ!!と、教室の後ろのドアが乱暴に開き、一人の女子生徒がズカズカと踏み込んだ。

噂の、理玖の彼女だ。美しい顔は怒りで歪み、まっすぐに私を睨みつけている。

「あんたが花？」

「は、はい……えと、理玖の彼女さん、ですよね……？」

「もう別れたけど!？」

金切り声が教室に響き、ふざけていた男子たちも固まった。

「てか、あんたがいるせいで別れたんだからね!? 理玖のやつ、私と何か話すた
びに、あんたの名前ばかり出して……本当に萎えるんだけど! 幼馴染だからっ
て調子乗らないで、さっさと縁切ってよ!!」

「え……?」

理玖が、私の名前を?意味がわからず呆然とする私の手から、先輩は無理やり箒
をひったくり、そのまま強い力で私をドンツと突き飛ばした。

「っ……………」

バランスを崩し、無防備に床に尻餅をついた瞬間。

「おい!!!」

窓ガラスが震えるほどの凄まじい怒号が轟いた。

廊下から血相を変えた理玖が飛び込んでくる。滅多に声を荒げるのではない理玖が鬼のような形相で先輩を睨み据えていた。

「いい加減にしろ!!花と俺に、金輪際近寄んな!!」

「り、理玖……っ、だってこいつが……!」

「第一、花には関係ねえだろうが!!俺がお前に愛想尽かしたただけだ!!」

氷のように冷酷な声で先輩を切り捨てると、理玖はすぐさま私のもとへ駆け寄ってきた。

さっきまでの恐ろしい表情が嘘のように消え去り、私を見下ろす瞳は痛々しいほどに揺れている。

「ごめんな。大丈夫?痛かったよな、怖かったろ?」

まるで壊れ物を扱うように、理玖はそっと私の腕を引いて立たせてくれた。その背中に庇われる形になり、私はただ理玖を見上げることしかできない。

打ちのめされたのか、先輩はポロポロと泣き出し、顔を覆って廊下へ走り去っていった。

嵐が過ぎ去った教室で、私を支える理玖の腕は、かすかに震えているような気がした。

私を守ってくれたことへの安堵よりも、「何か話すたびに私の名前を出していた」という先輩の言葉が、耳の奥ですっと反響して離れなかった。



高校を卒業し、私は都内の大学へ進学するために上京した。知り合いの誰もいない東京、両親が手伝いをして帰った後は、期待よりも不安で押しつぶされそうになっていた。引越し作業の翌日のことだ。

「あれっ？花ちゃん!？」

買い出しに出ようと玄関のドアを開けた瞬間、隣の部屋の前で大きなダンボールを抱えた見慣れた夫婦と鉢合わせた。

「えっ……おじさん、おばさん？どうしてここに……」

目を丸くする私の視線の先で、隣室のドアからひょっこりと顔を出したのは、間違えるはずもない、理玖だった。

昔から変わらない、人を惹きつける整った顔立ち。理玖は私を見ても少しも驚いた様子を見せず、ただ薄く笑って「よお」と片手を挙げた。

「え、うそ。理玖、隣の部屋なの……!？」

高校の途中からずっと、こんなふうに正面から向き合って、理玖の声を近くで聞くのは本当に久しぶりな気がした。……たぶん、あの掃除時間の事件以来だ。

「まあ、そういうこと。よろしくな、お隣さん。つーか俺も角部屋が良かったのにな。花に取られちゃったみたい」

驚愕する私をよそに、理玖の家族を交えた立ち話はさらに信じられない事実を明らかにした。

なんと、理玖が進学する大学も、私とまったく同じだと言うのだ。学部こそ違うものの、キャンパスは同じ。

東京というこんなに広い街で、同じ大学に進学し、あまたある物件の中からたまと同じマンションの、しかも隣同士の部屋になる確率なんて、一体どれくらいなのだろう。

頭が追いつかない私とは対照的に、理玖はまるで最初からこうなることが分かっていたかのように、平然と荷解きを進めていた。

「いやあ、偶然とはいえ隣が花ちゃんて本当に安心したよ」

理玖のお父さんが額の汗を拭いながら朗らかに笑い、荷物を運び終えた理玖の肩をパンツと叩いて真剣な顔つきで言った。

「いいか理玖。東京は何があるかわからん。何かあったら、絶対お前が花ちゃんのこと守ってやれよ」

その言葉に、私は慌てて「そんな、大丈夫ですよ」と遠慮しようとした。けれど、それより早く理玖の声が降ってきた。

「……わかってるっつの」

面倒くさそうに吐き捨てたような、ぶっきらぼうな声。けれど、ふと目が合った彼の瞳は、冗談や照れ隠しの色など微塵もなく真っ直ぐに私を射抜いていた。

「言われなくたって……俺が守るよ。絶対に」

その低く響く声色に、一瞬だけ背筋がゾクツとしたけれど、すぐに「だから花、醤油切らしたら貸せよな」と笑う理玖に、理玖のお母さんは呆れたように私に謝ってきた。

◇

引越しの荷解きが終わって、大学が始まるまでの二週間。バイトを探したり、履修を調べたり、慣れない土地でやることは山ほどあった。

それなのに理玖はこまめに時間を合わせてきて、気づけば一緒に外へご飯を食べに行くようになっていた。誘うのはいつも理玖からだったが、なんで毎回声をかけてくるんだろうと思いつつも、断る理由が見つからなかった。

ある夕方、駅近くの中華料理屋に入った。

古びた店で、円卓に回転するテーブルがついている。メニューは手書きで、壁に貼られた短冊がやたら多い。

「この店、口コミが良くてさ。気になってたんだよね」

理玖はメニューも見ずに餃子と麻婆豆腐と炒飯を頼んだ。

私が「多くない？」と言ったら、「花の分も頼んだ」と当然みたいな顔で言うから何も返せなかった。

しばらく他愛ない話をした。バイトのこと、履修のこと、慣れない街のこと。理玖は相槌を打ちながら、なぜかずとこっちを見ていた。

「なに」

「別に。久しぶりにちゃんと話してんなって思ってた」

久しぶり。そうだ、高校の途中からずっと、こんなふう二人で話すことはなかった。

餃子が運ばれてきて、理玖が取り皿に乗せてこっちに回してきた。

「……ありがとう」

「花さあ」

不意に理玖が箸を置いた。

「高校の時、俺のこと嫌いになった？」

「……急になに」

「いや、なんか距離できたじゃん。俺が悪かったのかなって、ずっと思ってた」

円卓がゆっくり回っていた。麻婆豆腐の湯気が、二人の間をゆらゆら漂っていた。嫌いになったわけじゃない。ただ、釣り合わないと思っただけ。手が届かないと思っただけ。

「……嫌いになったわけじゃないよ」

「じゃあ？」

「……環境が変わっただけ」

理玖はしばらく私を見ていた。

何かを言いかけて、やめた。

「……そっか」

それだけ言って、また箸を持った。でもその横顔が、少しだけ——ほっとしているように見えた。

どうして理玖がほっとするんだろう。

私はそれ以上考えないようにして、餃子を口に運んだ。

外はもう暗くなっていて、店の窓に二人分の影が映っていた。

◇

大学の講義が本格的に始まると、学部が違う理玖と顔を合わせる頻度はめっきり減った。

あんなに密度の濃かった引っ越し直後の二週間が、まるで淡い夢だったかのよう

に、日常は慌ただしく過ぎていく。

私は、新しい環境に馴染もうと必死だった。

高校時代、理玖という眩しすぎる光のそばで「ただの幼馴染」として影に隠れていた自分を変えたかったのかもしれない。

（ちゃんと、自分の居場所を作らなきゃ）

ただバイトと勉強に追われるだけの日々は、なんとなく味気なくて嫌だった。何か熱中できるものが欲しくて、私は掲示板で見つけた『天文同好会』の門を叩いた。

派手なサークルは苦手だけれど、静かな夜空を眺める場所なら、今の私にも居場所があるような気がしたからだ。

週に数回、部室へ顔を出し、先輩や同級生と星の名前を覚える。

そんなある日の夜、サークルの集まりを終えてマンションの廊下を歩いていると、隣の部屋のドアが開いた。理玖が財布を片手に持っていた。今から買い物に行く

ようだ。

「あ、ただいま」

「おう。今帰り？最近遅いじゃん、お前」

理玖はどこか探るような、それでいて無機質な瞳で私を見た。

「うん。天文同好会に入ったの。今日も部室で星図の見方を教わってたんだ」

「へえ。……星、ね」

理玖は鼻先で笑ったけれど、その目は笑っておらず、財布を握る手がわずかに白くなっていた。

「花、そういうの好きなんだ。……意外」

「そうかな？理玖は知らないと思うけど、昔はよく窓から見てたんだよ？理玖こ

そ、最近忙しそうじゃん」

冗談めかして言うと、理玖は私のそばまで一步、足を踏み出した。

「……お前が勝手に外で居場所作ってるから、俺が暇してるだけ」

「え？」

「なんでもない。……夜道、気をつけて帰れよ。お前が知らないだけで、夜の星なんて見てるやつ、ろくなのいねーから」

「そんな言い方しなくても……！」

少し不機嫌で、独占欲が滲み出ているような物言い。捨て台詞のようにそう言っ
て、理玖はエレベーターホールへと消えていった。

夜遅く帰ると、隣の部屋から声が聞こえることがあった。女の人の笑い声。それ
と、理玖の相槌。

でもその相槌が、あまりにも平坦だった。楽しそうでも、嬉しそうでもない、ま

るで義務のような声。

翌朝、ゴミ捨てに出ると、隣のドアが開いて知らない女の人が出てきた。

理玖はドアを開けたまま、見送りもせずにスマホを眺めている。

女の人は振り返って「またね」と言った。

理玖は「おー」とだけ言って、ドアを閉めた。私と目が合う、一瞬前に。

(……なんで、あんな顔してるんだろう)

楽しくもなさそうなのに、なんで連れてくるんだろう。考えかけてやめた。理玖のことを考えるのは、もうやめると決めたから。

◇

7月。蒸し暑い夜を脱ぎ捨てるように、天文同好会のメンバーで一泊二日の観測旅行に行くことになった。